

筑波大学日本文学会会報

第7号

昭和57年12月

北京の春……………平岡敏夫……………一

研究室だより…………………………四

卒業生だより…………………………五

住所録・名簿…………………………十一

北 京 の 春

平 岡 敏 夫

四月四日、北京空港に到着したときには、楊柳は芽をふきはじめてばかりだった。空港から都心に至る広い道路の両側は、高い並木がつづいていたが、その多くは白楊というのであろうか、太く高い幹の枝々にはまだ緑の芽はなかったのである。

四ヶ月間宿泊することになる友誼賓館は大きなホテルで、昭和二十年代にソ連技術者のため建設されたものという。ビルの上に中国風のいらかをのせたこの豪壮なホテルは、内庭も広く、たくさん樹木が植えられていた。プール、体育館、映画館、いくつかの食堂、売店等があり、何千という人が宿泊できるらしい。

そのうち、桃の花に似た花が咲き出した。黄色の連翹も大きく、あざやかだ。はじめて見たのは海棠の花だった。日本にも紅色の小さな花の美しい海棠はたくさんあり、それと同じ種類のものもあったが、北京で見るとは大きな樹木で、遠く見ると桜の花のように見えた。白い花を梢から下枝までいっぱいにつけて、それが何本も並んでいるのはまことに美しい。初夏になると海棠は青い実をつけ、それが鈴なりになって、陽をよく受けるあたりから、しだいに色づいてくる。かじってみると、あま味の出ているりんごのような味だった。

万里の長城へ行った。八達嶺というところで長城を登るようになっていたのだが、昔、元の大軍がここを破って南下したという居庸関の関趾では梅が咲き、病馬に農民が薬を飲ませようとしていた。山に近づくと、廃墟となった長城の遺趾が蜿々とつらなっているのが見える。そのあちらこちらに花が咲いている。それは桃の花であり、あとから植樹したものとわかった。中国では、学校や組織に割当があつて、植樹に一日を割いて山へみんなで行くのである。古色蒼然たる長城と可憐な桃の花とが何とも言えずよく調和していて、遠い昔がしのばれるような情景だった。

北京では花はほとんどいっせいに咲く。つい、この間まで枯木と見えていた高い白楊の並木がいつの間にか緑の葉をいっぱい広げ、風に鳴るのだった。夜はそれが驟雨の到来のように聞え、「幾夜目覚めぬ」ということになった。中国の詩人は「春眠曉を覚えず」とうたったが、それはめぐまれた文人のことらしく、一般の人は朝がめっぽう早い。三時ごろには人声が聞え、四時ごろには、通りを大きな竹ぼうきで掃いて行く音が「ざあ、ざあ」と聞える。馬のひずめの音も近づいては遠去かて行く。たいてい三頭の馬が荷車を引いているのだ。五時ごろには、S・Lの汽笛の音がとくによくひびく。このホテルから一番近い始発駅は西直門駅で、ここから八達嶺の長城の山峽を抜けて、モンゴル、果てはモスクワまで行くのかも知れない。ベッドのなかで、桃の花がほのかに咲いて散在する長城の風景を思い浮かべたりする。

街も村もほとんどの大通りが白楊やアカシヤ、楊柳の並木になっていて、春たけなわの新緑はまことにみずみずしく、日ざしが強まってくると、私もその葉蔭伝いに歩いたり、自転車を走らせたりした。青や黒の上衣を脱いで、白いシャツだけになり、それをズボンの下へ入れないでそのまま垂らすようになるともう初夏である。女性もぼつぼつスカートをはき出す。スカートは小学生がいちばん早いようだ。

リラの花は十メートルも手前からよく匂った。上海などを舞台にした昔の流行歌には、このリラを歌いこんだものが多いのでなつかしかったが、七月はじめ上海を訪れたときはもうリラの季節はおわっていた。白楊の葉ずれの音でなく、ほんとうに訪れた夜来の雨の翌朝、リラの花がこぼれているのも風情があつた。ホテルの正面近く、日本の八重桜が二、三本あつたが、黄塵に見舞われたあとだったせい、香りをかぐと、ほこりっぱかつた。

花ばかりでなく、実のなるものを、という毛主席の指示で植えたという胡桃くるみの木もたくさんあつたが、その花のことはいま記憶にな

い。盛夏に帰国するときは桃ほどにも大きくなっていたその青い実の印象が強すぎたからかも知れない。

北海公園や頤和園いわえんなどの名園は、花ざかり、人ざかりで、手をつなぎ、肩を抱いた二人連れも多かった。数年前の四人組時代では考えられない光景だという。春の日暮れの紫竹苑公園のベンチは、すべてアヴェックで占領されていた。着飾ったひとりだけの子を、まさに掌中の玉のごとく、両側から手を引いて歩く若い夫婦の姿もほほえましかった。北京の春は、今とりとめもなく思いおこすだけでも忘れがたくなつかしいものだった。